

「おねえさん」より「幸男君」へ

佐藤弘子

秋田県・六五・自営業

幸男君お久しぶりです。あれから五十年の歳月が流れました。当時私は洋裁を習う為秋田から上京し、府中貫井前から国分寺に通っていました。立川から発着の飛行機音が一日中空のどこかから聞こえ、通いの途中にあった少年院の金網の中で幸男君も同じ様に聞いていた筈。屋内の様子はわからなかったけれど、寛いでいるみなさんをいつもみておりました。通行人との触れ合いは無規制の中の規制の如く親しげな会話の様子は見かけなかったです。

その朝もお下げ髪で歩いていると、「おねえさんおはよう」と金網の中から貴方が声をかけられたんです。

背が高く知的な顔立ち、私は咄嗟に「おはよう」と言って小さく手を振ったの。同じ年位か？ 柄の大きい私はおねえさんで良かったの？ 貴方にはおねえさんがいて呼んでみたかったの？ 呼んで呼んでいつでも何かの支えになるのなら。そしてこの時、貴方に名前をつけたんです。

早く幸せな男になる様に願いを込めて幸男と。今は近寄る事の出来ない人、金網の向うに見え隠れする姿を時折確認して幸せを祈っておりました。私も家を離れていた寂しさもあって、声をかけてくれた一言がいつまでもいとしく、強い幸男君になってね」と呼びかけながら通り、それは自分に言っていることでもありました。

——それから半世紀が流れ去り——

今はすっかり変貌したであろう貫井前界隈、二年ほど前に充分日数をとって東京巡りをしたけれど、訪ねてみたいと思う反面、大切な青春のおもいでが壊れそうで躊躇してしまい実現しませんでした。

幸男様、私の祈り通り幸せな男性になってくれたでしょうか。意を強く人の道を注意しながら歩いて、今ではよく似たお孫さんがいたりしてね。一度お逢いできたらどんなに嬉しいことでしょう。その場所はきままち阪にして下さいませ。私はこの頃とみに弱くなった腰をその時ばかりはピンと伸ばして、束の間おねえさんになることでしょう。